

関西学院大学 研究成果報告

2020年 3月 17日

関西学院大学 学長殿

所属：文学研究科
職名：博士研究員
氏名：波部雄一郎

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input checked="" type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	ヘレニズム研究とグローバル社会における国民史
研究実施場所	関西学院大学上ヶ原キャンパス第1教授研究館1階「グローバル歴史・記憶研究」レンタルラボ
研究期間	2019年 4月 1日 ～ 2019年 12月 31日（9ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

当該研究課題は、日本学術振興会・課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業：グローバル展開プログラム「グローバル社会におけるデモクラシーと国民史・集合的記憶の機能に関する学際的研究」（「グローバル歴史・記憶プロジェクト」研究代表者：橋本伸也関西学院大学文学部教授）の一環として実施した。

本研究の目的は、19世紀以降の「ヘレニズム」概念の変遷とその背景にあるヨーロッパやアジア、アフリカにおけるナショナリズムとの関連性について、以下の2点の問題点を考察することによって、解明することにある。

第1点は、これまで研究テーマとしてきたプトレマイオス朝（紀元前4世紀末～紀元前30年）について、20世紀以降の同王朝に対するイメージの変化とその要因を明らかにすることである。先行研究はこれまで、プトレマイオス朝が紀元前200年ごろに大きな変化を迎えると認識してきた。王朝の創設から紀元前200年頃までは、東地中海世界沿岸部を支配する繁栄期とされるが、その後は王家の内紛とエジプト人の反乱による内因的な衰退と、エジプト以外の領土の喪失とローマの覇権の拡大による対外影響力の低下を要因とする衰退期と認識されてきた。本研究では、まずプトレマイオス朝研究の同時代史料である、ポリュビオス、ディオドロス、ポンペイウス・トログスらによる紀元前3世紀から紀元前1世紀に至る歴史記述を分析した。その結果として、この三者の歴史記述が「普遍史」のジャンルに分類され、オリエントや地中海世界全体の歴史が、ローマによる支配に収束される前提

で記述されていること、また著者はそれぞれローマ人あるいはローマの支配を肯定する人物であったことを指摘した。それをふまえて、これらの歴史記述においてローマの勢力拡大時期におけるプトレマイオス朝など東方のヘレニズム諸王国がどのように記述されているかを分析し、比較的民主的な集団支配体制であるローマが、東方的専制支配のヘレニズム東方諸国を征服するというモデルが構築されていると結論づけた。

次に、19世紀以降のプトレマイオス朝をめぐる研究史や文学作品、映画についての分析を試みた。プトレマイオス朝については20世紀半ばまで、エジプト（＝オリエント）をマケドニア人、ギリシア人（＝ヨーロッパ）が支配する国家であり、この間に被支配者であるエジプト人が、先進文化であるギリシア文化を受容するようになったと理解されてきた。このような考え方には、ヨーロッパ諸国によるアジア・アフリカ諸国の植民地化と支配という時代背景が投影されるという指摘は、すでにポストコロニアル的な研究手法や、E. サイドの「オリエンタリズム」に影響を受けた諸研究によってなされている。本研究では、現代でもこのような「ヘレニズム」化の図式が根強く浸透している点を指摘し、文学作品や映画で扱われるプトレマイオス朝が東方の退廃した専制国家として描かれ、一方でこれに敵対し勝利するローマは、質実剛健な特性が強調され、専制政治を否定する国家として描かれる傾向にあることを指摘した。このようにイメージされた古代における「東」の国家像は、20世紀におけるアジアやアフリカの独裁国家に、「西」の国家像は西洋における民主主義国家を壮栄するものであり、イメージの形成が意図されてきたと結論づけた。今後の課題としては、上記のような図式が20世紀以降、歴史教育の中でどのように扱われていたかを検討したい。ヨーロッパとイスラーム圏のいくつかの国や地域を事例とし、国民史の形成にどのような役割を果たしたのかについて考察する。なお、本研究の成果については、Yuichiro Habe, “Floating Palace on the Nile: A Study on the Luxury Ship of Ptolemy IV Philopator”, *JASCA (Japan Studies in Classical Antiquity)*, The Classical Society of Japan (日本西洋古典学会), 2020, 53-70に一部反映している。

第2点は、古代におけるギリシア文化とユダヤ文化をめぐる先行研究の分析によって、現代のヘレニズム研究の動向を明らかにすることである。事例として、紀元前1世紀に現在のイスラエル、パレスティナを支配したユダヤの王であるヘロデ1世を取り上げて考察した。従来のヘレニズム研究およびユダヤ研究では、ヘロデは王としてユダヤ教を尊重しユダヤを支配する一方で、当時東方で広がっていたギリシア文化を受容し、異教であるギリシアの神々の聖域に寄進行為を繰り返しただけでなく、ユダヤにおいてもギリシア都市やギリシア風の建造物、および彫刻などの美術品を建立させたと理解されてきた。当該研究期間中に、ヘロデについての主要史料であるフラウィウス・ヨセフスの『古代史』および、『戦記』、またはユダヤはじめ東地中海各地から出土したギリシア語碑文、さらにヘロデの鑄造貨幣における図像を分析し、ヘロデについて再考した。その結果、まず彼の出自がユダヤ人から差別を受けたイドマヤ人であることを指摘し、ユダヤ社会あるいは、ローマ帝国内において地位が上昇する過程で、ユダヤ文化、そしてギリシア文化を受容し、適応していったと結論づけた。

2019年度の研究期間では、ヘロデについては予備的な調査に止まってしまったが、上述したヘロデの持つイドマヤ人としての特性が、先行研究においてどのように理解されているのかを引き続き考察する。それによって、従来ギリシア＝ヨーロッパ、ユダヤ＝ヘブライズムという二項対立的な図式で描かれてきたヘレニズム・ローマ時代のユダヤ史に一石を投じるだけでなく、イエスの同時代におけるユダヤ・パレスティナ地方の文化状況の解明を目標としたい。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。